

〈中絶〉される論争

——「愛情の問題」をめぐる林房雄と宮本百合子——

池田啓悟

はじめに

宮本百合子——当時中條百合子は、『改造』一九二五年一月号に発表した「揺れる樹々」のなかで、主人公伸子とその恋人佃一郎とのあいだの次のような会話を描いていた。

「第一私共は二人でやつと生活をするに定つて居ます。満足な教育もさせてやれない親になるのはいやよ。それに……私の心持の中に何かすらりと受けられないものがあつて——」

伸子は、低い声で尋ねた。

「男のひとに、私のこの可怖さが解つて？ 実に可怖いのよ。可怖くて、斯う云つて居ても堪らなく成るやうなものがあるの本能的に。」

佃は、ひどく散文的に云つた。

「何でもないでせう 其那ことは」

伸子は、彼の情味の欠けた調子で微に傷けられたやうな口調で云つた。

「何でもない事とは思はなくてよ。私は、さういふ心持があり乍ら一方、此方の女の人達のやうに平気で純科学的に取扱へない心持が強くあるのです——（略）」

文中「此方」とあるのは物語の舞台であるアメリカのことであり、こ

れは産児制限のことを指していると考えられる。この作品は、手を加えられて上で一九二八年三月に『伸子』として出版された。

そのとき、百合子はすでにロシア文学者の湯浅芳子とともにソ連にいた。『伸子』は自伝的小説とされているが、作中の伸子の思いは作者百合子の思いでもあつたのだろう、この地で百合子は養育費や墮胎、同一労働に対する男女同一賃金、産前産後の有給休暇、無料産院に託児所などについて調べ、そうした施設にも何度か足を運んでいる。墮胎の問題を単なる「モラル」の問題から解放したソ連の制度を賞賛しつつも、同時に「男が性的交渉に於いて具体的な責任をもたぬ。アポルト（墮胎——引用者注）すりゃいいじゃないかといった風な傾」（一九三〇年五月三十日の日記）があると書きつけなければならぬ現実がそこにあつた。

そんな百合子にとって、日本から送られてくる雑誌の中に引っかかる記事があつた。一九二八年七月二〇日の日記には次のような記述がみられる。

林房雄のコロントイのチョーチン持をよみ、頭のひだがまだよく發育して居ないのを感じ。自分の本を売るにはなかなか有効であるう。何故なら、あの論文をよむと、どこに真髓があるのか判らず、本ものをよんで、はつきり理解したいと思うであろうから。

センチメンタルでない新しき恋をセンチメンタルな調子でかいてある論文なり。

全集の注ですでに指摘されいることだが、ここで百合子が言及しているのは「新『恋愛の道』コロンタイ婦人の恋愛観」(『中央公論』一九二八年七月号)であったと思われる。ソ連の政治家コロンタイの小説を翻訳した林房雄が、その小説の作中人物の生き方に基づいて新しい恋愛を提唱したのがこの論文だった。このときはまだ、百合子は自分が後にプロレタリア文学の陣営に加わり、林房雄を「同志」と呼ぶことがあるとは思っていなかっただろう。ましてや、直接二人が論争をすることになるということも。

一九三三年一月号の『プロレタリア文学』に百合子が書いた「一連の非プロレタリア的作品」は、それまで蓄積されていた日本プロレタリア文化連盟(略称コップ)指導部に対する不満を爆発させる引き金となった。そしてその引き金を引いたのは、反指導部の態度を鮮明にしていた林房雄だった。ここにいわゆる「右翼的偏向に関する論争」が頂点に達する。この論争の背景は、二人の性質の違いを超えて、プロレタリア文学の創作理論、芸術大衆化論、「愛情の問題」をめぐる論争、ハウスキーパー問題など、プロレタリア文学運動の中で解決されることなかった様々な問題が、地層のように積み重なっているのである。だが、ここでもまた、問題は解かれることなく切り捨てられる。しかし、ここに百合子と林が加わることによって、この論争は指導部と反指導部、抑圧者と被抑圧者を簡単に腑分けすることのできない混沌とした様相を呈する。この場で闘われていたのはいったい何だったのか、そして切り捨てられたものは何だったのか、本論で明らかにしたい。

一、プロレタリア・リアリズムと題材の固定化

『プロレタリア文学』一九三二年一二月号に掲載された蔵原惟人からの

獄中書簡は、プロレタリア文学運動における「創作活動の不振」の問題に触れていた。

私の「芸術的方法についての感想が発表されてから、或る作者は「あれが出たので創作が出来なくなつた」と言つたといふことを聞きました。若しこれが事実であつたならば、私はその為の創作活動の不振に対してその責任の一半を負はなければならないわけだが、しかしそれはあの私の感想を本当に読んで呉れなかつた為だと思ふ。といふのは、私はあそこで我々の創作に対する何等かの規範を与へようとしたのではなくて、むしろその創作の根底を為す現実に対する作者の見方を問題にしてゐるからです。

蔵原が谷本清の変名で発表した「芸術的方法についての感想」(『ナツブ』一九三一年九月号・一〇月号)は、それまでの指導的創作方法であつた「プロレタリア・リアリズム」に代わる新しい方法として「唯物弁証法」を打ち出した論文として知られている^②。しかし、確かにプロレタリア文学の中で「創作活動の不振」がクローズアップされるようになるのは、「芸術的方法についての感想」が発表されて以後のことなのである。それ以前に問題とされていたのは、「題材の固定化」であつた。この「題材の固定化」もまた蔵原の論文に関係していた。そのことを確認しておきたい。

戦後の座談会で、蔵原は自らの理論について次のように語っている。

蔵原 プロレタリア・リアリズムという言葉はソヴェートでもちよつと出たが、向うではあまり問題にならなかつた。しかし僕はこれはよい言葉だと思つて、自分の考えであの論文を書いた。今から見ればもちろん不十分だったが、「芸術的方法」を書いた時には僕はそれをプロレタリア・リアリズムの発展として考えていた。ただね、ソヴェートの方では唯物弁証法的創作方法というのが出てきて

弱っちゃったわけだ。(笑)だから内容はプロレタリア・リアリズムの発展みたいなもので、アヴェルバツハなんかとはかなり違っているつもりだ。

引用文中「あの論文」とあるのは、『戦旗』一九二九年五月号(創刊号)に掲載された「プロレタリア・リアリズムへの道」を指している。この発言は平野謙のソ連の「唯物弁証法的創作法」のスローガンと蔵原の「芸術的方法についての感想」を単純に結びつけるのに反対だという発言を受けて、それがソ連から導入されたものではなく、自身の論を発展させたものとして構想されたことを語ったものである。「プロレタリア・リアリズムへの道」はプロレタリア文学における「指導的創作方法」とされてきた理論であった^④。そしておそらく、それ以後の蔵原の理論の原型はここにあった。この点を確認するために、まず「プロレタリア・リアリズムへの道」の論理構成を確認しておきたい。

この論文の要は「現実に対する芸術家の態度」という概念である。論文冒頭で「イデアリズム」を「没落しつゝ、ある階級」の、「リアリズム」を「勃興しつゝ、ある階級」の「現実に対する芸術家の態度」とし、その上でかつての勃興する階級、ブルジョアジーの「ブルジョア、リアリズム」を個人主義的観点に立つものと、社会的観点をとるものの二つに分け、そのどちらでもない「第三のリアリズム」である「プロレタリア、リアリズム」を取り上げる。「プロレタリア作家」の態度は「客観的現実的」でなければならず、「あらゆる主観的構成から離れて現実を見、それを描き出さなければならぬ」という。そして「台頭しつゝ、ある階級の立場に立つものとして」、「プロレタリア作家こそが「現在に於けるリアリズムの唯一の継承者たり得る」というのだ。

だがここで蔵原が言う「客観的」とは、決して中立的なものではない。それは「決して現実——生活に対する無差別的冷淡的態度」でも「超階

級的、た然とする態度」でもないが、しかし「現実を現実として、何等主観的構成なしに、主観的粉飾なしに描かうとする態度」であるという。どういうことか。蔵原は「小ブルジョア、リアリスト」が「あらゆる生活の問題の解決を抽象的なる正義・人道に求め」、「階級協調的」に描くが、これが「自己の主観的構成をもつてそれを見ること」なのだという。なぜなら「社会発展の推進力」が「階級と階級との(略)公然たるまたは隠然たる闘争にあるのであることは、既に過去の歴史の進行そのものが、これを証明する所」だからだという。つまり、蔵原にとって客観的現実とは「階級闘争」なのである。これこそが、主観を離れて存在する客観的な現実であり、これを描かないこと、もしくは協調的に描くことは、「現実」を主観的に歪めたことになるのである。だからこそ、蔵原は次のように言う。

プロレタリア作家は何よりも先づ明確なる階級的観点を獲得しなければならぬ。明確なる階級的観点を獲得するとは畢竟戦闘的プロレタリアートの立場に立つことである。(略)彼はプロレタリア前衛の「眼をもつて」この世界を見、それを描かなければならぬ。プロレタリア作家はこの観点を獲得し、それを強調することによつてのみ真のリアリストたり得る。

蔵原の重視する「現実に対する芸術家の態度」、言いかえるなら「作家の態度」とはこのとき「階級的観点を獲得」する努力としてあらわれる。このように見ていくと、蔵原が「プロレタリア・リアリズムへの道」で論じているのは「プロレタリア文学とは何か」ということよりも、「プロレタリア作家とは何か」ということだったといえる。しいて言うなら、蔵原にとって「プロレタリア文学」とは「プロレタリア作家」が書いた「作品」ということになるだろう。

それではある作家がプロレタリア前衛の観点を持っているかどうかは

どうやって判断するのか。その作家の作品を読むしかないだろう。ではある作家がそのような作品を書こうとしたとき、彼／彼女はどうすればいいのか。そのためにはプロレタリア前衛の観点を獲得するしかない。作家の立場から考えたとき、蔵原の論理構成はこのような堂々巡りになっている。「指導的創作方法」とされた「プロレタリア・レアリズムへの道」であったが、この論文に「創作方法」など書かれていないのだ。

それでも、この論文は「指導的」ではありえただろう。作家の立場から見たときには堂々巡りの議論でしかなかったとしても、他方で、批評家からこの論文を読めば、作品を通じて作者へと働きかける手がかりを根拠づけている。この作品には階級的観点が欠けている、それは即ち作者に階級的観点が欠けているからだ、というように。いわば蔵原の「理論」とは「創作方法」であるというよりも現実の作家へと働きかける「組織論」なのである。

さらに蔵原は、佐藤耕一の名で発表した「ナップ」芸術家の新しい任務——××（共産——引用者注）主義芸術の確立へ——（『戦旗』一九三〇年四月）で「社会民主主義的観点」と「共産主義的観点」の違いを問題にする。この違いの強調は、「社会ファシズム論」⁵を踏まえ、こうした新しいテーゼに対応するために書かれたといえる。そして、「文芸戦線」派と「戦旗」派の芸術の間に「質的な相違」が見られない理由として、「ナップ」の理論家や芸術家達が、政治的・思想的には左翼の立場に立つておながら、「如何にしてその要求を作品の中に具体化するかと云ふ実践的問題を十分に解決し得なかつた」という。ここでは、これまで等閑視されていた「作品」の問題が浮上しているといえるだろう。しかし、その解決法を論じる段になると、再び問題は「作家」の側に回収されるのである。「作品の中に具体化する」ことを問題化しながらも、結局「現実のポリシェヴィキ的××（共産）主義的芸術家となる」ことによってそれ

は解決出来るとされてしまうのだ。

この「現実のポリシェヴィキ的××（共産）主義的芸術家」という規定は、当時貴司山治が提唱していた「プロレタリア大衆文学」を排除する根拠としても機能した。⁶『戦旗』一九三〇年七月号に掲載された「芸術大衆化に関する決議」は、貴司の「忍術武勇伝」（『戦旗』一九三〇年二月号）などを名指しで批判し、イデオロギーを水で割ってゆるやかにすることが許されると考えた逸脱であるとしている。この決議に「3. 何を題材とするか？」という節があり、「かくて、わが同盟の第二回大会は「芸術運動ポリシェヴィキ化」の方針を確立した。それと同時に我々の芸術に扱はるべき題材の選択の規準も又、我々の運動方針に以下の如く整理されるに至つたのだ」として、前衛の活動や農民と労働者の結合など描くべき「題材」として一〇項目が挙げられた。「ナップ」芸術家の新しい任務」では「題材」について、「若しも彼が××（共産——引用者注）主義者であるならば、第一に彼はプロレタリアートとその×（党——引用者注）の必要から全然かけ離れた題材を取扱うことは出来ない」が、同時に「題材は広汎なだけ望ましい」と書かれていた。しかし、それは具体的にはどのように両立しうるのか、この論文にその答えを見つけ出すことはできない。この点を曖昧にしたまま、「芸術大衆化に関する決議」はむしろ取り上げるべき題材が限定する方向で出されたのである。プロレタリア文学において「題材の固定化」が問題とされるようになるのは、一九三〇年末のことであり、すなわちこのすぐ後のことなのだ。⁷

二、「主題」と「題材」

蔵原の「芸術的方法についての感想」は、「題材の固定化」を意識して冒頭で「題材」を問題にしている。「何を」描くべきかといふことは

「芸術大衆化に関する決議」で一応解決したかに見えるが、しかし「このやうな『題材』の羅列」は問題を解決しなかったという。そこで打ち出されるのが、またしても「作家の見方」＝「観点」なのである。

我々にとつて必要なことは（略）この問題を『如何』にといふ問題と結びつけて『何を如何に』描くかといふ風に問題を提出すること、これである。それは（略）個々の『問題』ではなくて、（略）作品の中心的題材とそれに対する作家の見方をも含む所の主題（テーマ）の問題である。

この論文の中で蔵原は、「題材」について「作者の手が入らない限り××的なものでも反×命的なものでもない」とし、他方で「主題」とは「『作者の観点から整理された題材』のことである」と定義している。先に、「ナップ」芸術家の新しい任務」において「題材は広汎なだけ望ましい」ということと「彼が××（共産）主義者であるならば、第一に彼はプロレタリアートとその×（党）の必要から全然かけ離れた題材を取扱うことは出来ない」ということがどう両立するのか曖昧であることを指摘しておいた。「題材の固定化」とその対策であった「作品の多様化」とのあいだの揺れは、蔵原理論における「題材」の扱いの曖昧さが引き起こしたと見ることが出来る。そして「芸術的方法についての感想」は、その問題に蔵原自らが決着をつけようとした論文だといえる。そこで出てきたのが「主題」と「題材」の区別であった。「主題」とは、「題材」の問題をこれまで打ち出してきた「作家の観点」と関連付けたものだと出来る。このとき切り捨てられたものが「愛情の問題」なのである。

成程、我々が『愛情の問題』を取上げる以上、それが作品の主要な部分を成すこともあるであろうしかし『愛情の問題』そのものがプロレタリア文学の中心的主題になることはないのである。（略）問題の核心を為すものは、これらの作家達が『愛情の問題』をそれだけ

引き離して作品の中心的主題とすることによつて、主題の積極性を喪失したところにあるのである。（略）プロレタリアートにとつては家庭や恋愛の問題はその関心の一部ではあるが中心の問題ではない、彼にとつては最大の関心事は階級闘争であり、従つて彼が家庭や恋愛を取り扱ふ場合にも、それは作品の中心的主題として取り上げられるのではなくて、全体的階級闘争の一部として取上げられて取扱はれなければならないのである。

蔵原は、「題材は広汎なだけ望ましい」ということと「プロレタリアートとその×（党）の必要から全然かけ離れた題材を取扱うことは出来ない」ということの両立を、「主題」という概念を導入することによつて、多様な「題材」を取り上げてもいい、しかし「主題」は「階級闘争」のみ、という形で整理した。こうして蔵原は「プロレタリア・レアリズムへの道」で提唱した〈作家の観点〉という視点のもとに「題材」の問題も位置づけることが出来た。だからこそ、この論文は「方法」について自信を持つて次のように定義するのである。

だが我々に必要な創作方法、若くは芸術的方法とは具体的にはどういふことをいふのであるか？ それは先づ第一に事物に対する正しい具体的な認識——即ち弁証法的唯物論の認識である。

「創作方法」とは「認識」である。これは「プロレタリア・レアリズムへの道」で確認した、「プロレタリア作家の書く作品」＝「プロレタリア文学」、「プロレタリア文学の創作方法」＝「プロレタリア作家になる方法」という構図そのままでもあった。この構図の中で「弁証法的唯物論」は「プロレタリア作家」が身につけるべきとされた「前衛の眼」を言いかえたものにすぎない。むしろ「主題」という概念によつて「題材」の問題をも「作者の観点」、「認識」へと一元化できたことのほうがここでは大きな意味をもっていたのではないか。⑧ 実際、この論文ではあらゆる

問題が「作者がこの問題について正しい認識を持つてゐなかつたから」「正しい認識が作者に欠けてゐるから」という言葉で片付けられているのである。小林多喜二の「独房」や、「愛情の問題」の作品群などは、こうした蔵原理論の完成のための踏み台にされたのである。

三、「愛情の問題」の系譜

「愛情の問題」をめぐる作品群は、一面では芸術大衆化論争のある種の帰結である「題材の固定化」に対する作家たちの応答として出てきたものだが、他面では芸術大衆化論争とほぼ同時期からある論争を引き継いだものでもあった。それは「コロントイズム」と呼ばれた恋愛論をめぐる論争である。

世界初の女性大使としても知られるコロントイは、ロシア文学研究者の杉山秀子によると、日本で最初にまともな紹介されたのは山川菊枝の「アレクサンドラ・コロントイ女史」（『女性』一九二四年一〇月号）であったという^⑨。ただ、このときは「世界初の女大臣」である彼女の活躍を語っているだけで、「コロントイズム」と呼ばれたような「恋愛論」の紹介はない。それが登場するのは、一九二七年の『赤い恋』登場以後のことである。

杉山によると、『赤い恋』原題『ヴァシリ・サ・マルイギナ』は一九二三年『働き蜂の恋』のなかの一作として書かれたもので、『赤い恋』というタイトルは英訳の『レッド・ラブ』を借用したものであるという。日本には松尾四郎の翻訳で一九二七年一月三日、世界社より刊行された。同時代評を見ていくと、このときは比較的好意的に受け取られていることがわかる^⑩。

ところが、一九二八年四月、林房雄の訳で『恋愛の道』（世界社）が刊

行されると状況が変わる。この本には「三代の恋」と「姉妹」という二つの小説が載っていたのだが、特に注目を浴びたのが「三代の恋」であった。例えば高群逸枝は『東京朝日新聞』五月一八日付の「新刊良書推奨」で、「三代の恋」の登場人物「ゲニア」の恋愛観こそ筆者コロントイの見解だろうとした上で、伊藤博文を引き合いに出し「この書におけるコロントイの解釈は、このブルジョア政治家流と同意見のもので、新しい恋愛観などいふべきものではなからう」としている。

これに噛み付いたのが翻訳者の林房雄であった。「新『恋愛の道』コロントイ婦人の恋愛観」（『中央公論』一九二八年七月号）の中で彼はコロントイがこれらの小説の中で「新しい性的関係の心理的研究」を試たとし、その中でとくに「三代の恋」の「ゲニア」を取り上げ、それが「単なる過渡的な淫蕩にすぎない」ものではなく、「新しい生活、新しい感情、新しい概念を持った階級の新しい道徳」なのだという。そしてコロントイの論文などを引き、「合法的結婚」「売淫」「自由恋愛」のいずれも充分ではなく、「恋愛遊戯」の過程を通じて、人は利己主義や独占欲、嫉妬心から解放され、「真の恋愛」にいたることが出来るのだとする。

さらに、「人間の価値」は「彼の仕事、社会的有用性によつて決せられる」のであり、「恋愛は私事」であるという考え方は、「男性の間には珍しくない考え方」で、「偉大なる事業の遂行者は、彼の性的生活の如何を問題とされてゐない」とした上で、高群の書評に触れている。

ある同時代の女流評論家が、「三代の恋」を評して、コロントイの恋愛観は、例へば伊藤博文のような人の持つてゐたそれと一致する、別に珍しいものではない、といふ意味のことをのべたのを私は最近読んだが、なるほどそれは一つの理屈だ。たゞ、この評論家が見落してゐることは、伊藤博文の場合には、女が単なる「美しい享樂物」に化せられ、そしておそらく女の方もそのつもりでゐたことだ。が、

それより重大なことは、コロンタイがかゝる恋愛観の承認を、男性に対してだけでなく、特に女性に対して要求してゐることだ。この要求が実現されるためには、従来の男の付属品としての女が、伊藤博文とまでには行かずとも、少くとも一般の男性と同等な「独立人」「活動人」の水準にまで自己を高めてゐることを必要とする。一個の独立人、活動人としての女性が、現実の社会に大衆的に出現してゐることを必要とする。

ではそのような女性は現実にいるかと問いかけ、コロンタイはいると答えていると林は言い、それが労働婦人なのだという。したがってコロンタイの恋愛観は「働く者の恋愛観——プロレタリアートの恋愛観である」というのが林の主張の骨子だ。

これに対して高群は「官僚的恋愛論を排す コロンタイ婦人の恋愛観について」(『中央公論』一九二八年八月号)でさまざま反論した。高群は林の言うコロンタイの恋愛観は「中性的な女官僚」のものであるといい、「男性の恋愛観をそのまま女性が踏襲することの不可能」な理由として「母性」の問題を挙げている。二人の論争を論じた山下悦子は次のようにまとめている。

高群には恋愛が単なる私事で、仕事の妨げになる場合には子供は墮胎すればよいといったゲニアのような女性は「男化した女」にしか見えなかつたのであろう。確かにコロンタイを支持する林の恋愛論も、男性としては進歩的であるにしても、妊娠、出産といった女性が抱えざるをえない問題に関しては、まったく触れておらず(気がつきもしないという感じなのだ)、新しい恋愛観や男女の関係を求めることに性急なあまり、結婚制度否定、家族否定を観念的に語りすぎる傾向がある。林の観念的な論理が高群には「不自然」に見えたのだとしても不思議ではない。

林房雄の恋愛論が「妊娠、出産」という視点を欠落させているという指摘は重要である。プロレタリア文学の多くは、ついにこの問題を主題にすることが出来なかつたように思う。この点は後で見えていきたい。林のいう「プロレタリアートの恋愛観」は多方面から批判にさらされる。その中でも一番大きかったのがレーニンの恋愛観の紹介だろう。高群の「官僚的恋愛論を排す」が出たのと同じ月号の『女人芸術』に、神近市子がゼシカ・スミスを翻訳する形でレーニンとクララ・ツエトキンの会見の内容を紹介している。

レーニンとクララ・ツエトキンとの会見は、千九百二十年に行はれたもので、(略)レーニンは、最初のプロレタリア政府が全世界の反革命運動を向ふにして戦つてゐた間に、労働婦人の論争の範囲が主として性と結婚の問題に止つてゐたといふことに驚いたといふことから話を始めてゐる。(略)所謂「新しい性生活」は、全然ブルジョア的であつて、丁度形をかへたブルジョアの売笑制度の家のやうな気がする。凡てこれは我々共産主義者が考へてゐる自由恋愛とは似ても似つかぬものである。あなたは、共産主義者の社会では性的衝動と恋愛要求との満足は、一杯の水を飲むやうに簡単で些細なことであるといふかの有名な理論は、よく御承知だ。実際我等の青年達は、あの理論で気を狂はしてしまつた。それが多くの青年男女の禍となつてしまつた。その信仰者達は、それがマルキストの理論だと主張する……

『実際に、渴きは癒されなくてはならない。けれど常識ある人間が普通の状態の下に街に座つて泥水を飲みますか？ 又沢山の人がつかつたコップで飲みますか？ しかしそれよりもつと重大なのはそれの社会的局面だ。水を飲むといふことは、個人的の事だ。けれど二人の人が恋をする。それから第三者たる新しい生命が生まれて

来る。こゝに社会の利害が入つて来る。集団に対する義務が、考慮されなくてはならない。¹³⁾

「三代の恋」への反発は強く、急速に「コロントイズム」は革命の混乱のなかで生まれたもので、現在では時代遅れであるというような言説が広がってゆく。例えば秋田雨雀は「現代露西亜の恋愛と結婚」(「婦人世界」一九二九年六月号)で「日本では、コロントイ女史の「赤い恋」(原名ワシリーサ)や「三代の恋」等が翻訳されたのを機会に、ソウエート・ロシアの恋愛や結婚問題やが度々論議されてゐる。(略)然し「赤い恋」や「三代の恋」の中に表はされてゐるソウエートの性的生活、結婚生活はすでに過去に属するものであつて、決して現在の状態を示してゐるものではない。たゞ革命直後の性的混乱時代の一部の現象を示してゐるに過ぎない」と語っている。そして何より、すぐに林房雄自身がこうした言説を取り入れて、方向転換をはかつていくのである。

一九三〇年一月号の『中央公論』に林房雄は「プロレタリア恋愛学」を発表する。その中で「革命の直後、非常な性的混乱がロシアを支配したのは事実である」と言い、次のように指摘する。

プロレタリアの若い男女が実践したものは、決して新しい時代の恋愛及び性関係ではなく、古いブルジョア的な単なる肉欲解放、ポヘミアン式の自由恋愛、又は所謂「直接法の恋愛」に外ならなかつた。

例の「水飲み恋愛論」——共産主義社会に於ては、性的衝動と恋愛欲求の満足は、一杯の水を飲むやうに簡単で些細な事象である、といふデカタンな「理論」が、マルクス主義の仮面を被つて横行したのもこの時代である。

この中で一切語られていないのは、かつて林自身が「三代の恋」の作中人物「ゲニア」に依拠して提唱した「プロレタリアートの恋愛観」とここで語っている「マルクス主義の仮面を被つた」デカタンな「理論」

との関係である。かつて林は「ゲニア」は「新道徳」か「単なる過渡的な淫蕩」かと問ひかけ、コロントイの主張は後者ではありえないと語っていたのである。つまり、「過渡的な淫蕩」の状態があり、それを越えてコロントイの主張が出てきたとしていた。ところがここでは「過渡的な淫蕩」は語つても「コロントイズム」には触れないのである。その上で、神近が「コロントイの『恋愛の道』」に対するロシアの批評として紹介したレーニンの恋愛論を、「有用な正しい方向への示唆」としてここで引いているのである。

たしかに咽喉が乾いたときは、水が与へられなければならない。だが普通の状態にある普通の人間が、大道で寝たり、汚い泥水を飲んでりするだらうか。外の大勢の人が飲み荒して汚した一つのコップで飲むだらうか。

のみならず、水を飲むことは個人的なことだ。だが恋愛に参加するのは二人の間で、従つてそこに第三のもの、社会的利害関係、社会に対する義務が生れて来なければならない。プロレタリアの恋愛関係、性関係は、決して単なる生理学的若しくは経済学的見地から理解さるべきではなく、この社会の総体的見地から理解されなければならない。

これと神近のゼシカ・スミス経由の翻訳と比較したとき、見落とせないのは、ここでも「妊娠・出産」が抜け落ちてゐることである。神近は「二人の人が恋をする。それから第三者たる新しい生命が生まれて来る。こゝに社会の利害が入つて来る」というように、「恋愛」の結果、「第三者たる新しい生命が生まれて来る」、すなわち子どもが誕生し、それによつて「社会の利害」が生じるとしている。一方林は「第三のもの、社会的利害関係、社会に対する義務が生まれて来なければならない」というように、「第三のもの」がすなわち「社会的利害関係」や「社会に対す

る義務」としている。「生理学」、すなわち「妊娠・出産」の過程は決定的に林房雄の中から排除されているのである。自らの意見を曖昧なまま大胆に変更した林房雄であったが、その過程でコロナイズムと共に、「妊娠・出産」の問題があたかも〈中絶〉されるかのように排除されていくのである。

そして、林房雄と高群逸枝の論争のさなか、まさしく「妊娠、出産」を正面に据えた作品が書かれていた。野上弥生子の『真知子』である。

四、〈論争〉としての『真知子』

『真知子』は、『改造』一九二八年八月号の「真知子」に始まり、『中央公論』一九三〇年二月号の「血」で完結した。主に曾根真知子の結婚問題が描かれており、当時の女性における実質的な高等教育機関であった専門学校を卒業した上、帝国大学で社会学を聴講するほどの学がありながら、周囲からは「嫁に行き遅れた女性」として扱われ、少しでも条件のいい結婚先を見つけようとして奔走する家族とその属する社会階層に絶望し、社会運動へと身を投じる友人米子にあこがれ、彼女を通じて出会った運動家関三郎へとひかれていくという筋立てである。『改造』一九三〇年五月号に発表された「彼女と春」でその関と結ばれる所が描かれているのだが、コロナイズムが関係してくるのはその七ヵ月後の『中央公論』一二月号に発表された「血」においてである。

関と結ばれた真知子は、家を捨てる決意をし、荷物を取りに戻る。そこへ大阪に行っていた米子が訪ねてくる。私は結婚するのだという真知子に、米子は自分も関と結婚していたのだと告げ、さらに彼の子どもを身ごもっているという。衝撃を受けた真知子は、しかし決着をつけに関に会いに行く。自分の米子に対する感情は、親友であった米子の死んだ

兄に対するものと変わらないとし、また彼女が大阪に行ったことで関係は終わったと言いつ切る関に、真知子は米子の妊娠のことを告げ、「女がひとり母親になれるとお思ひになるんですか」と詰め寄る。

『関さん、あなた方の運動が人間から貧乏をなくするやうに、斯う云ふ苦しみをもなくするのでなかつたら、結局何になるんでせう。どんな見事な組織で未来の社会が出来上らうとも、斯んな思ひで苦しむものが一人でも残つてゐる間は、パンや着物で苦しむ今の世界が不完全だと同じに、決して完全な世界ではない筈です。』

（略）『——一つ考へて見て下さい。人間がパンや着物に苦しむやうに、君の強調するやうなことで誰も彼も苦しむと思ひますか。ないと云へない。人間に病気があつたら、貧乏のない社会が来てもその種類の苦痛は、多分残るでせう。併し個人的な、特殊の、限られた場合に於ける私事にしかそれは過ぎない。その日の民衆の勝利や幸福、それを実現させてゐる組織とは関係ない筈です。例へばこの資本主義の社会に於て、どの家かで誰かが歯痛に悩んでゐることが、一般の飢餓や失業や、ストライキと関係はないと同じで。——もしそれを何か関係があるやうに考へたり、一小部分の現象で、全部の構成まで否定しようとしたりするのには、過去の個人主義的迷妄ですよ。』

（略）『それがマルキシズムの理性なんですか。あなた方が口癖にしてゐらつしやる正しい認識と云ふのはそれなんですか。——仮にさうだとしても、あなたからそれを教へられようとは思ひませんわ。』ここで関が援用しているのがコロナイズム、正確に言えば林房雄によつて「プロレタリアートの恋愛観」に祭り上げられたそれであった。付け加えると、この関三郎という人物はもと「文学」関係から社会運動へと入り、はっきりとは書かれていないが京都学連事件の被告であると

されている。おそらく、これは京大連事件で治安維持法最初の被告として捕まり、一九三〇年七月に判決を受けた林房雄を部分的にモデルにしていると考えられる。さらにいえば、「正しい認識」とは蔵原惟人の創作理論の要であった。『真知子』は「コロンタイズム」への直接的な批判ではない。それはすでに「過去のもの」としてプロレタリア文学陣営で処理されていた。『真知子』が問題とするのはむしろその処理の仕方なのである。過去のこと、終わったことと通り過ぎようとするプロレタリア文学側に、もう一度その問題を突きつけ、プロレタリア創作理論の要であった「正しい認識」を示してみると突きつけたのがこのテキストであった。

「愛情の問題」をめぐる作品群の中で、おそらく江馬修「きよ子の経験」（『ナツプ』一九三一年二月号）は『真知子』を意識して書かれている。主人公きよ子は、ブルジョアの家で育ち、お茶の水高等師範に通っていたが、非合法な社会科学研究会に参加していたことが学校側に見つかり放校になる。研究会でチューターを務めていた野口を頼り、消費組合で働くことになる。それが物足りなくなってきた頃、原田や安村と言った党員たちのレポーターの仕事を任される。実家にいづらくなっていたきよ子は、そのことを原田に相談すると、家を出て自分の仕事を手伝ってもらいたいといわれる。きよ子はさっそく実行し、原田と住むようになる。原田は「三代の恋」などを例に出し、肉体関係を求める。コロンタイズムを小ブルの恋愛観と退けていたきよ子であったが、ついに断りきれず、関係を結ぶ。やがて原田を愛するようになったが、ある日彼が捕まり、きよ子は警察で原田に妻も子もいるのだと聞かされる。悩んだきよ子は野口に相談する。野口は原田の行動は問題だが、それによって左翼運動全体にまで懐疑的になるのは間違いだと言われる。きよ子は反省し、運動によりいつそかたい決意をもって取り組むようになる。こ

のあらずじはほとんど『真知子』のパロディであり、それによって江馬修が何を批判しようとしたかよくわかる。つまりそれは、「きよ子の経験」の「原田」のような人間でもって「左翼運動全般」を否定するにはあたらない、ということなのだ。『真知子』で言うならば、「関三郎」一人のために左翼運動を批判するなど問題外ということだ。裏を返せばこうした人物は時々あらわれる「変節者」に過ぎないというわけである。実際、これは『真知子』に向けられる批判のひとつの定型である。

だがこれは『真知子』への批判足りえていだろうか。それは結局、「一小部分の現象で、全部の構成まで否定しようとしたりするのは、過去の個人主義的迷妄」だという関三郎の論理をなぞっているに過ぎないのではないか。「きよ子の経験」でも批判されるべき人間である「原田」と批判者の「野田」が分けられているだけで、その論理自体はほとんど変わらない。さらにいえば、「関三郎」や「原田」を一部の「変節者」として排除することは、コロンタイズムを過去のもの、革命期の混乱として〈中絶〉しようとする態度と共通している。林房雄が「ゲニア」の態度を「新しい恋愛」として持ち上げたとき、これに対する批判として神近市子らがそれを過去のものとしたのは拒絶する方法としてある程度有効であっただろう。だがそれは同時に、ある種の過ちを左翼運動の〈本質〉にはかかわらないもの、ある種の〈異物〉として排除できるものという便利な構図を生み出し、問題を検討する道をふさいだのではなかったか。後に林房雄自身がその言説を苦もなく取り入れたように、それは非常に使い勝手のいいものであった。そしてこの使い勝手のよさを享受したのは林だけではなかった。「きよ子の経験」できよ子は自分の立場を原田にとつて「女中を兼ねた秘書官」だといっているが、これはつまり「ハウスキーパー」である。「愛情の問題」をめぐる作品群は、同時に「ハウスキーパー」を取り上げた作品群でもあった。この〈ハウスキーパー〉問

題について、戦前から「乳房」(一九三五年)などで早くから批判していた宮本百合子でさえ、戦後次のように語っている。

私自身の生活の経験を考えてみて、身辺のたれそれの生活を考えてみて、ハウススキーパーの「制度」などは決してなかった。ハウススキーパーという名のもとに女性を全く非人間的に扱ったのは公判廷で^⑤ 告白しているとおり警視庁から入ったスパイの大泉兼蔵などであつた。

ここでもまたハウススキーパーは「スパイ」と結びつけられ、(真の)共産党の方針からみれば(異質)なものとして切り捨てられているのである。左翼活動を誹謗中傷から守ろうとするがゆえに、百合子もまたこうした排除に加担することになり、問題それ自体を追及する道が閉ざされてしまった。問われるべきは、共産党が「制度」としてそれをもつていたかどうか、ということだけでは不十分だ。言い方をかえれば、ハウススキーパーの問題は共産党が党として加担していなかったなら、やっていたのはスパイだったなら、それで済むという問題なのだろうか。問題を(異物)として排除する論理が、こうした問いかけを拒むのである。そして、排除の論理を完成させたものもまた、蔵原惟人の「芸術的方法」についての感想」だった。

五、「正しい認識」と「愛情の問題」

蔵原はこの中で片岡鉄兵「愛情の問題」を取り上げ、この作品が『階級闘争の必要のためには、あらゆる個人的な幸福を破壊するのだ』といふ思想の上に打ち立てられてゐる」とし、「婦人闘士」に肉体関係を求めてきた「石川」が検挙されることよつて問題の解決をはかったことに對し、「この問題を作者が作爲によつて解決しなければならなかつたの

は、作者がそれを真実に『芸術的』に解決し得なかつたからであり、作者がこの問題について正しい認識を持つてゐなかつたから」だとする。

では「正しい認識」とは何か。党の機関にかけあつて「石川」に何らかの処分を下すことであり、「一人の女性の『人間的権利』を擁護することだ」という。「現実の運動がこのやうな無理の上に打建てられてゐるのであるとするならば、運動はそこから崩壊して来るであろう」とする蔵原の見解はいたつて常識的であり、それ自体は責められるものではないのだから。だが、実はこの論文は、問題は解決されるより取り除き、排除されることこそが目指されている。女性の権利を擁護することも「階級的必要」であると語つた後、次のように続けている。

そして事実の問題としてもこのやうな手段を取ることを許さない程情勢が迫切してゐることは極めて稀有であり、しかもそのやうな切迫した場合はこのやうな問題は起らないであらう。

蔵原がここで語つてゐるのは(虚構)の話ではなく「事実の問題」である。機関にかけあつて処分を下すことができないような場合というのは「稀有」であり、もしあつたとしてもそのときはそもそも「このやうな問題は起らない」、それが「事実」だと言ひ切るのである。そうなること、「事実」としては起らないはずのことを(虚構)として書いたことが「正しい認識」ではなかつたということになる。実際、蔵原はこう書いているのだ。

これを要するに、我々が『愛情の問題』を取扱つたプロレタリア作家の作品を読むとき、そこに不自然を見、それが拵へ物であるといふことを感ずるのは、これらの作品が現実に存在しないこと、或は極く例外的にしか存在しないことを、本質的なものであるかのやうに描いてゐるからであり、そしてその根底に横はるものは、愛情及び『愛情の問題』についての正しい認識が作者に欠けてゐるから

である。

ここにあるのは、問題を〈異物〉として排除するあの排除の論理である。蔵原が「愛情の問題」批判で繰り返すのは「実際」「現実」という言葉である。例えば「現実」に於いては、はたで見えてゐる程『階級の必要』と『個人的感情』との間に『悲劇的分裂』はないのである。そこではこの二つのもの、独自の統一が見られる」というのだが、その「独自の統一」がどのようなものなのかは具体的に語られない。ただ繰り返されるのは、そこに問題等ないということなのである。

しかし実際に闘争してゐるものにとつては、このことは、はたで見えてゐる程それ程『呪はれた問題』ではないのである。実際若い男女が同じ家に住んでゐる場合に、愛情、若しくは単なる好奇心が発動して、夫婦の関係を結ぶことはあり得ることであつて、何の不思議もない。この場合二人が本当に愛し合つてゐるのであるならば二人は結婚するであろうし、それ程でもなければ別れてしまふだろう。しかし別れた所であつてそのことをくよくよとして煩悶したり、懺悔したり、するには当たらないのである。また実際に闘争してゐる人達であればそんなことをくよくよとはしないのである。それをブルジョア道徳家や坊主ならいざ知らず、いやしくもプロレタリア作家ともあるうものが、そのことを捉へてあつかも重大問題でもあるかのやうに書き立て、主人公を煩悶させたり『自己批判』させたりするのは実際不都合な話なのである。

ここで蔵原が主張しているのは、起きた問題にどう接するか、ではなく、問題などないのが本当だ、ということなのである。そして蔵原が描く「実際に闘争してゐる人達」の姿は、不思議なことに林房雄が「ゲニア」にもとづいて思い描いた「恋愛遊戯」を繰り返す「真の愛」を指すというゲニアイズムと大差がないように見える。何よりも共通してい

るのは、「夫婦の関係」というのが性的な関係を指すとして、そこでの「妊娠、出産」の可能性が全く考慮されていないことなのである。当人同士の意思にかかわらずやってくる「第三の生命」の可能性はここでも〈中絶〉されている。

つまり、林房雄の恋愛論も、それを小ブルの恋愛論と批判していた「きよ子の経験」も、また「きよ子の経験」を「小ブル的思考方」と何が違うのかといつて批判した蔵原惟人も、結局どれも同じ思考の枠組みに立っている。ただ、林が「コロライズム」を排除したように、問題を常に〈異物〉として排除することによって、「批判」が成立しているように見せかけているに過ぎない。それは何が問題かを追及するのではなく、むしろそうした追及を閉ざす役割を果たす。妊娠と墮胎を繰り返すように、同じ問題が提起され、その度に何らかの〈異物〉が発見されては排除され、問題そのものは温存されるのである。

おわりに

一九三二年四月、治安維持法の刑期を終えて林房雄が出獄してきたとき、プロレタリア文学運動の〈異物〉として排除されそうになったのは彼自身だった。林が獄中にいるあいだに、ナツプはコップへと再編成され、コップ指導部は作家たちを「文化サークル」の組織へと駆り立てていた。その一方で、プロレタリア作家たちの間では「題材の固定化」に代わって「創作活動の不振」が叫ばれていた。そうした中で、林は「作家のために」(『東京朝日新聞』一九三三年五月一九・二二日)「文学のために」(『改造』同年七月号)「作家として」(『新潮』同年九月号)などで文学活動への専念を宣言した。

一方、指導部の方はその少し前、一九三二年の二月から三月頃にか

て、「創作活動と組織活動の弁証法的統一」というスローガンを打ち出していた。これは、「創作方法、若くは芸術的方法」がすなわち「正しい具體的な認識」＝「弁証法的唯物論の認識」であった蔵原理論を引き継ぐものであり、作家が直接工場や企業に向いてサークルを組織することを通じ、その活動を通してプロレタリアートと接触し、その「世界観」を獲得する、という論理にもとづいていた。

林はこれを真つ向から批判したのだが、そうした態度は指導部から「右翼的偏向」のあらわれとして攻撃を受ける。プロレタリア文学運動は、もはや作家が作家活動に専念することすら〈本質〉から逸脱した〈異物〉として排除しようとしたのである。

このとき、「右翼的偏向」指弾の急先鋒に立っていたのが、宮本顕治、小林多喜二、中條（宮本）百合子らであった。その中で、百合子が『プロレタリア文学』一九三三年一月号に書いた「一連の非プロレタリア的作品」に対して林房雄は噛み付いた。同年二月号の『改造』に発表した「文芸時評」は林から各作家にあてた手紙の体裁を取っているが、その中の須井一へ宛てた箇所で、「批評といへば、きみもとうとう中條百合子にやられたね。（略）この見習女中は、藤森さんやきみやぼくの小説を材料に、千切り大根の切り方の練習でもするつもりらしい」と書いているが、これは「一連の非プロレタリア的作品」で藤森成吉や須井一を批判したことをさしている。その上で百合子の作品を次のように批判した。

中條百合子があんまりえらさうなことをいふから、ぼくはかの女の報告文学「一九三二年の春」なるものをよんでみたよ。

あれはなんだ？ かの女の日記ではないか？ 日記が報告文学になるなら、ぼくなんか毎日報告文学をかいてゐる。日記の中で、ひとりで昂奮するのはよろしい。だれもよまないのだから。——だが、人によませるつもりでの報告文学なら、事実の具体的な姿はなにひと

つ書かず、ひとりであらばつたり昂奮したり、説教したり……はよしてもらひたいね。（略）

それはそれとして、どうだ、「一九三二年の春」の中で、まづよめる部分は、信州の雪をみて、宮本顕治と一しよに旅行してみたくなつたり、おしまひの方の助平話の部分だな。中條百合子は、むかしから、助平な話になると、息をはづませ、われをわすれて生地をだす小説家だつた。万事この調子で、生地で行つてくれれば、もつと人をうごかす作品がかけるのになあ！

百合子の「一九三二年の春」は最初『改造』一九三二年八月号に掲載され、その後書き足して『プロレタリア文学』一九三三年一月号、二月号に掲載され、このとき「報告文学」とつけられた。林の言う「おしまひの方」とは『プロレタリア文学』一九三三年一月号掲載分の最後の部分を指すと思われる。その最後の箇所は次のようになっていた。

「さうさ！ 窪川鶴次郎がもつてゆかれたこと、いね子が一人で赤坊を生まなければならぬこと、大森で気が変になつたこと、みんなつながつた一連の問題で根もととはたつた一つなんだもの……。がんばらうよ、ね」

組合の仕事をしてゐる人との間では仕事の関係上、結婚生活が従来の型では行はれない場合が既に多いらしい。プロレタリア文化活動の分野でも、運動が高まるにつれ、家庭生活も当然変化して来て、段々夫婦がいつも必ず一つ屋根の下に暮すことは出来ない場合が殖えさうだといふ話が出た。

「一緒に暮せる間、万々遺憾ないように大いに積極的に暮すべきだわね」

「そんなことになる、作家同盟の婦人作家が片つ端から「愛情の問題」の傑作ばかり書いてやりきれなくなつちやうかもしれない

ね」

これには思はずみんな笑ひ出し、云つた当人の窪川いね子も床の上に座つたなりハアハアと闊達に笑つた。笑ひつゝ、この問題はみんなの心につよく刻まれたのである。

林のいう「助平話」とは「愛情の問題」をめぐる話であり、「妊娠、出産」をめぐる話でもあった。かつて、日記の中でひそかに林を批判していた百合子であったが、奇しくも、林の側から「愛情の問題」をめぐる第二回戦が仕掛けられたのであった。ただし、百合子が林房雄に応じた「前進のために」（『プロレタリア文学』一九三三年四月・五月合併号）で問題にしたのは、「見習女中」という言葉だった。

私は同志林が恐らく最も軽蔑的な言葉として選んだであらう言葉が、それに対して全プロレタリアが闘つてゐる最も封建的な社会性を反映する『見習女中』であつたことに、意味深いものを感じた。

そしてこの「女中」こそ、「きよ子の経験」の中できよ子が自分の立場を語つた言葉ではなかつたか。様々な問題が解決されずにここまで来たことを、一連のやりとりが鮮やかに示している。

だが、このときもつとも反発を受けたのは、百合子の方だった。「前進のために」も半分は自己批判として書かれている。百合子の「一連の非プロレタリア的作品」と林の挑発は、作家同盟に巢食っていた不満を爆発させるきっかけとなった。「愛情の問題」に目をつむれば、この論争で「抑圧者」だったのはコップ指導部の立場をとつていた百合子の方なのである。皮肉なことに、百合子の従おうとした指導方針こそ「愛情の問題」はプロレタリア文学運動の主題にならないと宣言した蔵原理論にもとづいていた。百合子と林の対立は、こうした錯綜した状況を浮かび上げさせている。

このときの指導部批判は、小林多喜二の死によって一時的に収まる。

しかし、鍋山貞親・佐野学の転向、治安維持法改悪案の議会提出、「唯物弁証法的創作法」を批判した社会主義リアリズムの紹介などが相次ぎ、作家同盟は一九三四年に解散する。プロレタリア文学運動の「組織」は、様々な問題を積み残したまま終焉を迎えたのである。（中絶）したまま残された問題の解決は、各自の作家が向き合ねばならなかった。

注

- ① 蔵原惟人「創作活動の不振について」『プロレタリア文学』一九三二年二月号、62ページ。
- ② 例えば池田寿夫『プロレタリア文学運動の再認識』（三一書房、一九七一年二月一日）では「（略）谷本清署名の「芸術的方法に就いての感想」は、当時のプロレタリア文学の創作・批評の状態を完膚なく批判し、創作における唯物弁証法的観点を強調し、主題の積極性、事物の正しい認識、階級的分析、芸術的概括、典型的タイプの創造などの創造的新段階を指示した」（27ページ）とある。
- ③ 『討論日本プロレタリア文学運動史』三一書房、一九五五年五月三十一日、36ページ
- ④ 池田寿夫は「（略）いわゆるプロレタリア・リアリズムが提唱され、指導的創作方法となった。これを提唱したのは蔵原惟人だった」と書いている。（『プロレタリア文学運動の再認識』三一書房、一九七一年二月一日、17ページ）実際、一九三〇年四月に開催された作家同盟第二回大会では「文芸運動のボルシェヴィキ化」と「プロレタリア・リアリズムの貫徹」が運動方針とされた（山田清三郎「大会を通じて同盟の発展を見る」『プロレタリア文学』一九三二年四月号、75ページ）。
- ⑤ 例えば針生一郎は、日本のプロレタリア文学運動に重大な影響を与えたテーゼが一九三〇年前後にいくつか提起されたことに触れ、そのうちの一つに「社会ファシズム論」をあげ、「このテーゼは「第三期論」をふまえて、第二期以来ブルジョア国家機構に組みこまれつつあった社会民主主義勢力が、第三期の激動のなかで独占資本と完全に癒着し、プロレタリアートに敵対するファシズムの一翼となったと規定する。そこから、社会民主

主義指導部に攻撃を集中して、共産主義の指導下に「労働者階級の多数者を獲得する」という、戦術的課題も提起されたのである」と説明している。(針生二郎「ソヴェト芸術論と蔵原惟人の役割」『文学』一九八一年三月号、27ページ)

⑥ 貴司山治は「文学大衆化問題の再三提起」(『文学評論』一九三五年八月号)の中で「問題の最初の提起は蔵原、中野、鹿地等による一九二七年の論戦、第二回が一九三〇年に、僕などが参加しての論戦——この時は「文学大衆化に関する決議」が産み出された」と回想している。貴司山治と徳永直を中心とした芸術大衆化論争については、和田崇「蟹工船」の読めない労働者——貴司山治と徳永直の芸術大衆化論の位相——(『立命館文学』二〇〇九年一月号)に詳しい。

⑦ 「創作方法に於けるレーニン主義の確立のために」(『プロレタリア文学』一九三二年三月号)では、「所が、一九三〇年の終り頃から、作品の固定化、一様化、類型化の事実が見られるや、今度は階級的規定を含まない『作品の多様化、広汎化』といふ標語が叫ばれ、創作的実践に於ては小ブルジョアの観点への転落、非政治主義的傾向、主題の積極性の喪失があらはれるやうになつた」としている。もちろん「作品の多様化」に対する否定的評価は、蔵原惟人の「芸術的方法についての感想」を通過した後の見方である。例えば、一九三二年七月二日付の『東京日日新聞』「文芸時評」で宮本顕治は、「固定化への反逆」と題して小林多喜二の「独房」(『中央公論』一九三一年七月号)を取り上げ賞賛しているのである。

⑧ 実際、「弁証法的唯物論」と「プロレタリア・レアリズム」との関係については、「再びプロレタリア・レアリズムについて」(『東京朝日新聞』一九二九年八月一・一四日)ですでに触れられており、ここで初めて出てきたわけではない。

⑨ 杉山秀子『コロンタイと日本』新樹社、二〇〇一年二月二〇日、147ページ。

⑩ 例えば、平林たい子は「コロンタイ女史の『赤い恋』について」(『文芸

戦線』一九二八年一月号)で「ぜひおす、めしたい」と語り、平塚明は「新刊良書推奨 赤い恋」(『東京朝日新聞』一九二八年二月二三日)で「赤い恋」(コロンタイ女史著)は近頃読んだ小説のうちでもつとも深く身にしむものでした」とし、神近市子は「新しき恋愛理論について」(『女性』一九二八年三月号)で主人公のたった行動が「唯一最上のものだとは云へないかも知れませんが、しかし最も聡明な態度の一つだったとは云へる」と語っている。

⑪ 山下悦子『マザコン文学論』新曜社、一九九一年一〇月九日、136ページ

⑫ 山川菊枝「コロンタイの恋愛観」(『改造』一九二八年九月号)、平林たい子「コロンタイズム」(『社会科学講座』第三卷、誠文堂、一九三一年五月一日)など、林房雄の翻訳や論文を機に、かつてのコロンタイの紹介者や賛同者が批判にまわつたのである。

⑬ ゼシカ・スミス、神近市子訳「革命と恋愛」『女人芸術』一九二八年八月号、17ページ

⑭ 例えば渡邊澄子は「関のような革命家はいただろうし、現在もいる。革命運動の足を引張るようなこのような人物は描かれなければならぬだろう。しかしその描き方が問題なのであって、(略)関が左翼運動全体の代表のような役割を背負わされていて、関の背信・不誠実は左翼運動の否定につながりかねぬ雰囲気を生み出してしまっていることで、反共小説ふうに読まれても仕方のないような側面をみせている」と指摘している。(渡邊澄子『野上弥生子の文学』桜楓社、一九八四年五月二五日、155ページ)

⑮ 「社会生活の純潔性」、初出は『婦人朝日』一九四七年五月号、引用は『宮本百合子全集』第十六卷 新日本出版社、一九八〇年六月二〇日、114ページ

(本学大学院博士後期課程)